東北 VALUE SIGHT 宮城

歩くことが困難であっても、ほんの少し足を動かすことができればこぐことができるという「足こぎ車いす」が開発された。障害者本人であってもあきらめていた、足を使って移動することを可能にしている。利用により、できることが増え、生活が変化し、さらには、気持ちも前向きになるという好循環がうみだされている。㈱TESSの鈴木代表取締役は、人生の可能性を広げる足こぎ車いすの普及に努めている。

株式会社TESS　代表取締役

鈴木　堅之（すずき・けんじ）

盛岡大学文学部児童教育学科卒業。
岩手県の更生施設職員や山形県の小学校教師を経て、2008年11月㈱TESSを創業。2011年第17回東北アントレプレナー大賞受賞。2013年日本クリエイション賞受賞。2014Japan Venture Awards2014経済産業大臣賞受賞。
静岡県下田市出身。

株式会社TESS
宮城県仙台市青葉区荒巻字青葉６－６－40
東北大学連携ビジネスインキュベータ404
http://h-tess.com/

心も身体も動き出す　魔法の足こぎ車いす

困難を抱えている人のために

「歩行困難者や障害者、高齢者の方々に少しでも快適な生活を送ってほしい」という想いはこの東北、仙台から始まった。被災地の小さな中小企業からの発信に、材料を提供する会社、その試作品作りを請け負う会社が現れ、やがて救いの輪は台湾の会社までも動かし量産が始まったのだ。このことはNHKの番組やTBS「夢の扉」でも取り上げられ、特別番組も放送されたのでご存知の方もいるかもしれない。

2011年３月11日に発生した東日本大震災で自らも被災し、そして、開発者の一人を津波にさらわれながらも、今困難を抱えている人たちを支援するために「できることは何か？」と取り組んだこの足こぎ車いす事業は、今、世界を動かし、人々に新たな生きる力と希望を与えはじめている。

株式会社TESSでは、人とのつながり、関係を創っていくことが人生でもっとも大切なことだと考えている。もし、自分達の今いる場所に問題があれば、切り捨てたり、壁を打ち壊すのではなく、その場を変える一員になりたいという思いで、創業以来足こぎ車いす事業を続けている。

足こぎ車いすで自由に移動

できるという自信　自力～自立

起業当初、多くの人達は足こぎ車いすに興味も関心もなく、見向きもしなかった。

無理もない、“足こぎ車いす”と聞けば誰もが次のように思うのではないだろうか。

「車いすは足が不自由な人が使うもの」
「足が使えないのになぜペダルを付けるのか」
「足の不自由な人が足でこげるはずがない」

しかし、本当にそうなのか？多くの専門家や障害を負った方ご本人が「できない」と決めつけていることに私たちは大きな疑問を持った。

医学の進歩は日進月歩、しかしそれでもまだ、人体には知られざる謎が多く隠されている。人間の潜在能力には私達の想像をはるかに超えるものがある。実際にそのことを足こぎ車いすは証明し続けている。

「足こぎ車いすによって、自分で自由に動けるようになり積極的に外出できるようになった」「気持ちも前向きになり暮らしに張り合いが生まれた」、そう言って下さる利用者の方が日本はもちろん世界中にたくさんいるのだ。「女学校の頃の自転車通学を想い出しました」と晴れやかな笑顔で感想を話された女性もいれば、特別支援学校に通っている息子さんが「17年間で生まれて初めて自分の意志と足で移動ができた」と、涙を流して喜ばれたお母さんやお父さんもいる。

脳血管障害や脊髄損傷・頚椎損傷・脳性まひ・パーキンソン病など、さまざまな原因から歩行困難の状態に陥っている人は近年増え続け、日本国内だけでも、膝が痛い、腰が痛いといった軽度の症状の人もあわせると3,700万人にも上る。このような方々にとってつえを使って歩くことは転倒の不安や危険があり、速度もゆっくりでわずかな距離を移動することさえ実は大変なことなのだ。だからと言って従来の車いすでは足を使わなくなり、動かさない足は、長い間に筋力が衰え、関節の拘縮も起こりやすくなってしまう。それらの不安や問題点を解消したのが「足こぎ車いす」だ。

ペダルを逆にこげば後進し、こぐのをやめれば車いすも止まる。足の動きと車いすの動きの一体感は自分で自由に動けるという感覚につながり、少しくらいの長距離ならスピーディーに移動できるので、乗った瞬間から行動範囲が広がり、暮らしに自信が生まれ、障害を必要以上に重く意識することが少なくなる。

共感・共助から生まれる“希望”

科学の進歩によって医学は驚くべき進化を今も続けている。そこでは人間を生物体としてとらえ、研究の対象は臓器から組織、細胞から遺伝子と際限なく細分化されていく。治療の現場においても、人間から病んだ臓器を切り離して考えるようになり、人間の個性や生き方といった、言ってみれば生活の衣のようなものは無用、むしろ治療の妨げであると考えられているかのようである。入院の経験がある方は、少なからず、このように感じた事があるのではないだろうか。

一方、リハビリテーションとはこのような医療のもとではぎ取られてゆく生活の衣を、逆に着せて、重ねてゆく事のように思う。今から８年前、足こぎ車いすの販売協力先を求めて全国を歩き回っている時、「一度障害を負った方達はこんな物は使わない」「誰にも喜ばれないだろう」と多くの人達から言われ続けた。自分の知らない物や事が目の前に現れた時、まず否定から入ることほど恐ろしいことはない。医療や福祉にかかわる者にとってはなおの事だ。私たちはどうしても、手足の機能や動作といった目に触れる所の援助で終わってしまうことが多いのかもしれない。人の本心を知ることは非常に困難なことだが、援助しようとする立場にあるものは、たとえ的外れであってもそれをうかがい、自分の心に変えて思いを巡らす必要があるはずなのだ。なぜなら、見えないものは、自分が思わなければそこには何も存在しなくなってしまうからだ。障害のある方の苦悩や不安、希望が存在しないと考えるほど私達は鈍感ではないはずだ。

障害を負っても頑張っている人をよく見れば、必ず温かい人たちに囲まれている。病気などにより元気を失った方たちが再び力を得るためのきっかけとして、足こぎ車いすが存在する事を切に願ってやまない。

人とのふれあいを通して学び変わってゆくことがリハビリテーション・人生の真の姿だとすれば、希望を持ち続ける皆さんとともに、TESS社も同じ仲間として、これからも全力で足こぎ車いすの普及に努めていきたい。